第７回　新撰組

「誠」の旗を掲げて動乱の幕末京都で斬りまくった戦闘集団・新選組を扱った時代劇作品は数多い。時流の変化に抗い続けて義を貫いた不器用な生き様、池田屋事件や油小路の決闘など数々の壮絶な闘争、それぞれに際立った個性をもつ隊士たち……。まさにエンターテインメントの題材にはもってこいで、現在でも老若男女から幅広く愛されている。

今回はそんな新選組が魅力的に描かれた作品を紹介していきたい。

■『新選組血風録』（テレビシリーズ／1965 年・東映京都テレビプロダクション＝ＮＥＴ〈現・テレビ朝日〉／監督：河野寿一、佐々木康ほか／脚本：結束信二／出演：栗塚旭、島田順司、舟橋元、左右田一平ほか）

数ある新選組ものの映像作品の中でも、特に名作との誉れ高いのがテレビシリーズ『新選組血風録』だ。

司馬遼太郎の原作小説は時系列にこだわらずに個々の事件や隊士のエピソードをオムニバス的にまとめたものだった。が、本作の脚本を担当した結束信二はそれを時系列に紡ぎ直している。加えて、それだけでは全 26 話がもたないので、原作にはないオリジナルのエピソードもところどころに挿入した。土方歳三（栗塚旭）の恋模様を綴った「鴨千鳥」や、名もなき隊士兄妹（橋爪功・土田早苗）の悲劇を追った「紅花緒」。サブタイトルが示す通り、それらはいずれも新選組から連想される勇壮なイメージとは遠い、詩情あふれる淡いタッチの内容になっていた。

そしてシリーズ後半、結束脚本の本領が発揮される。原作は鳥羽伏見の戦い前に繰り広げられた新選組と、そこから脱して倒幕派に与するようになった高台寺党との壮絶な内ゲバを描いた《油小路の決闘》までで、組織の終末は描かれていない。それに対して結束は、鳥羽伏見から江戸への撤退、流山での近藤勇（舟橋元）の刑死、そして函館で土方が戦死するまでを新たに描き足している。

同時にその筆致は、回を追うごとにリリカルさを深め、切迫する現実から逃避するかのように物悲しく、そして優しい展開をみせる。鳥羽伏見の戦いに際しては、京都から撤退する新選組よりも、斎藤一（左右田一平）と身寄りのない貧しい少女との触れ合いに主眼が置かれた。

そうした描写の極致ともいえるのが、終盤の第二十四話「風去りぬ」だ。死の病に伏せり、千駄ヶ谷で療養する沖田を、生き残った隊士たちが訪れる。官軍の江戸侵攻を間近に控える中、死を覚悟した沖田と逆転不可能な形勢に立たされた隊士たち。遅かれ早かれ同じ運命をたどることになる彼らは、ほんの一刻、迫りくる終局がまるで夢か幻のように思えるような、静かでほのぼのとしたやりとりを繰り広げる。

「今度生まれ変わる時はな、俺は、お前のような人間に生まれたいと思っているよ」と語

りかける土方。「困るなあ。それじゃ。だって私はね、今度生まれ変わってくる時も土方さんと同じような人に逢いたいと思っているんですから」そう言って微笑む沖田……。どこまでも淡々とした静寂の中で、その終局が語られる。それだけに一層、時の流れに抗えずに滅びゆく新選組隊士たちのサーガが、切々と哀しく胸に沁み入ってくることになった。

■『沖田総司』（映画／1974 年・東宝／監督：出目昌伸／脚本：大野晴子／出演：草刈正雄、真野響子、池波志乃、高橋幸治、米倉斉加年、神山繁ほか）

終わりゆく時代とその中で展開される儚い青春。それもまた、新選組モノの大きな魅力である。そして、こうした要素を一手に担ってきた隊士が沖田総司だった。剣に関しては天賦の才を持ちながら、突然に不治の病に侵されて、短い人生を宿命づけられてしまう美青年。彼の存在こそが、新選組を悲劇的なものとして彩っているといって過言ではない。

映画『沖田総司』では、そんな沖田の短い青春が瑞々しく綴られている。草刈正雄の演じる沖田は、長髪を靡かせながら野山を駆け巡る、爽やかで躍動的な浅黒い肌の野生児。今日の食事にも困り果てるほどの貧しさに苦しみながらも、土方（高橋幸治）や近藤（米倉斉加年）との毎日を心から楽しんでおり、士官の話が来ても「好きなんですよ、ここが」「追い出そうとしても、そう出ていくものではありません」と断ってしまう。

そんな沖田をはじめとする新選組隊士たちを出目監督は決して畏まることなく、現代的な若者として描いている。誰もがボサボサの頭に不精ひげを伸ばし、泥や埃まみれた継ぎ接ぎだらけの薄汚い服をだらしなく着る。まさに、製作当時に流行していたヒッピーそのものだ。そのため、街を歩けば「徳川三百年も薄気味悪い奴らを生み出しやがった」と白い目で見られる。

京に上るのも、大それた志はない。その日の食い扶持を求めるためだけだ。新選組を結成するにあたっても、屯所の門前で「ワッショイ、ワッショイ！」と掛け声し合いながら、みんなで「誠」の旗を投げ合ったりしている。

結成後も一貫して「青春映画」として彼らの姿を追う。印象的なのは、近藤・土方・沖田が芹沢鴨（小松方正）の暗殺を企むシーンだ。通常、こうした謀議は薄暗い密室で行われる。が、彼らはそうではない。青空の下、川原で寝転がってせせらぎを聞きながら、暗殺に向けての話を進めていく。そして、沖田は嬉しそうに空を仰いで、つぶやく。

「懐かしいなあ。多摩の河原で喧嘩の相談してるみたいだ」

仲間と笑い合い、恋をし、そして戦う。沖田の周りではいつも《生》がきらめき続ける。だからこそ、陰でヒタヒタと近づいてくる《死》が、見る側に切なく突き刺さってくる。《嗚呼、この輝きはもうすぐ失われてしまうのか》と。

■『壬生義士伝』（テレビスペシャル／2002 年・松竹＝テレビ東京／監督：松原信吾、長尾啓司／脚本：古田求／出演：渡辺謙、柄本明、伊原剛志、金子賢、高島礼子ほか）

浅田次郎原作の『壬生義士伝』は、飢餓に苦しむ南部藩にあって家族を養うために故郷と捨て、新選組に入隊した吉村貫一郎（渡辺謙）の物語だ。映画版とテレビ版の両方があるが、渡辺謙が吉村を演じた二〇〇二年のテレビ版は、故郷の苦境にたっぷりと時間を割いて、吉村が入隊するに至る心理が丁寧に描かれており、映画版より鮮烈に想いの伝わる作品になっている。

「藩を捨てるは武士の罪だ。だども、童子（わらし）を捨てるのは人の罪」

「オメエたちこそ、ワシの主君だ」

渡辺謙の朴訥とした口調から語られる、こうした家族への素直な想いを綴った幾多の台詞に胸を打たれる。

南部に残してきた家族に仕送りするため、吉村は周囲から「守銭奴」「出稼ぎ浪人」と蔑まれながらも、規則を犯した隊士の首切りをはじめとする給金の多い汚れ仕事を平気な顔でこなしていく。やがて、「絵に描いたような美しい国でごぜえます……」と、故郷や家族への想いを切々と語る吉村に感じ入り、隊士たちの中からも理解者が現れていく。

朴訥とした吉村も魅力的だが、彼を取り巻く隊士たちもまた、心温かく優しい人間たちばかりだ。物語の終盤、病床の沖田（金子賢）が吉村に語りかけた台詞がそれを象徴している。

「どうなっても、僕は少しも構いませんがね。吉村先生、あなたは考えなさいよ。大事な家族がいるじゃないですか」

「大好きだったんですよ、そんなあなたが。僕だけじゃありません。勇さんも歳さんも……みんな分かってるんです、あなたのこと」

そんな人々の想いが美しく交差するのが、新選組と吉村の最後の戦いと別れが描かれる「淀の戦い」のシーンだ。

薩長の新式銃の前に次々と倒れていく隊士たち。吉村は新選組の退路を確保するため、単身で敵陣へ斬りこもうとする。だが、永倉新八（遠藤憲一）がそれを必死に止めた。

「吉村、逃げろ！逃げて、南部の妻と子供の元へ帰れ！死ぬのは俺たちだけでたくさんだ！」

「妻と子供を救ったのが新選組なら、その妻と子に生きて会うことが貴様の義じゃ！新選組の義じゃ！犬死することじゃない！」

それでも躊躇する吉村の後を押したのは、吉村の生き方を最も否定してきた斎藤一（竹中直人）だった。

「押し通せ、最後まで押し通すんだ！」

全てを失おうとしていた新選組にとって、吉村とその家族の行く末こそが最後の希望となっていたのだ。

彼らの想いに押され、吉村は隊を離れる。そして、かつては「脱藩者」の汚名を着て故郷を捨てた男が、今度は「死の損ない」の汚名を着て帰参を申し出る。全ては、家族にひ

もじい想いをさせないため。
　天下国家のためでも主義主張のためでもない。家族のために命を賭けることこそが「義」。それを貫く男がいて、理解する仲間がいる。本作の新選組は、そんな温かい場所だった。

■『壬生の恋歌』（テレビシリーズ／1983 年・NHK／脚本：中島丈博・神波史男ほか／出演：三田村邦彦、高橋幸治、夏八木勲、名取裕子ほか）

　だが、新選組は必ずしもそうした生易しい側面だけではない。外には倒幕派浪士との果てしない闘争があり、内には「違反したものは例外なく切腹」という鉄の掟がある。隊に属する誰もが、いつ死んでもおかしくない組織をまとめる上では、近藤や土方は非常に徹さざるをえない。そして若者たちは、ほんの少しの落ち度によって理不尽にも、無為に命を落としていく。
『壬生の恋歌』では、そうした非情な組織の中で懸命に生きようとする若者たちの青春が描かれている
　主役は、他の作品なら点描としてしか登場しないような下級の無名隊士たち。主人公の入江伊之助（三田村邦彦）をはじめ、物語を動かすのはいずれも本作のために創作された、架空のキャラクターだ。
　本作が珍しいのは、普段は見過ごされがちな無名隊士たちの日常が瑞々しく描かれている点にある。屯所の同じ部屋で寝起きをし、食事をとり、洗濯し、剣の稽古に汗を流し、バカ話したり相撲とったり喧嘩したり。彼らは文字通り「同じ釜の飯を食い」ながら、友情を育んでいく。そして、互いの恋や危機を助け合う。他に行く場所のない彼らにとって、屯所こそが《ホーム》であった。
　が、そこに容赦ない現実が襲いかかる。局中法度だ。第一話での、脱走した新米隊士が捕まって切腹させられる描写からも明らかなように、若者たちは何があろうとも隊を抜け出ることはできないという宿命を抱えている。そうした逃げ場のない空間の中、隊の規律のためには一切の妥協を許さない近藤（高橋幸治）と土方（夏八木勲）によって無名の若者たちは一人また一人と命を落とす。
　特に印象深いのは、畑中三郎（渡辺謙）と千石静馬（笑福亭鶴瓶）の死だ。
　三郎は女郎を巡る三角関係の果てに罠にかけられ、女郎殺しという無実の罪に陥れられる。仲間たちは無実を証明すべく奔走するが、全ては無駄に終わる。近藤からすれば、陥れられたこと自体が問題であり、無実かどうかはどうでもいいことなのだ。ようやく三郎の事件当夜のアリバイを証明する者が現れるが、そんなことは関係なく処刑されてしまう。
　静馬は長州の間者として隊に潜入していたものの、彼を兄貴分と頼りにしてくる仲間たちと楽しく過ごしていくうちに、心は新選組へと向かっていった。そして、「ワシはアンタたちと離れとうない。運命を共にしたいと思うとる」と仲間たちに全てを話し、長州を離れようと桂小五郎を襲撃する。が、裏切りは長州に露見しており、待ち伏せにより隊に多

大な犠牲を出してしまう。そして、その責任を問われ、処断された。
　若者たちは誰も皆、純情で不器用でお人好しだった。が、そのために皆、空しく死んでいった。

■『新撰組』（映画／1969 年・三船プロダクション／東宝／監督：沢島忠／脚本：松浦健郎／出演：三船敏郎、小林桂樹、北大路欣也、三國連太郎ほか）

　華やかなキャラクターとドラマチックな事件の数々に彩られた新選組はオールスター大作の題材にしやすい。中でも豪華キャストで知られるのが、69 年の映画『新選組』だ。三船敏郎（近藤）、三國連太郎（芹沢鴨）、小林桂樹（土方）、北大路欣也（沖田）、中村梅之助（山南啓助）、田村高廣（伊東）、中村嘉津雄（河合基三郎）といった主役級が隊士役として顔を揃え、中村錦之助も最後に近藤を介錯する役として花を添えている。
　主演はもちろん、近藤を演じた三船だが、これは謹厳実直な人間として描かれているため、キャラクターとしての影は薄い。その代わりに前半と後半のそれぞれを、二人の名優が全身から狂気をほとばしらせる名演で盛り上げている。
　前半を引っ張ったのは近藤と並ぶ局長で、その傍若無人な暴れ方のために粛清されてしまう芹沢鴨だ。これを演じるのが三國連太郎だから、手に負えない。その全身から発せられる得体の知れない狂気は並いるスターたちを圧倒、どう立ち向かっても歯が立たない存在感を示し続けた。
　この芹沢は、普段は堂々としており、頼りがいのあるリーダーだった。が、自らの立場のプレッシャーに耐えきれなくなり、酒に逃げる。そして、酒が入ると途端に変貌してしまう。三國の酔ってからの暴れ方が強烈だ。火をつけるわ、女を犯すわ、乱行三昧を乗り乗りの芝居で展開していった。
　だが、三國の本領発揮は酒が抜けた時の芝居だった。酒がない時は途端に気弱になるのである。そんな芹沢に対し、近藤は酒をやめるように諭す。近藤の想いを理解しながらも酒から逃れられない芹沢は涙ながらに弱音をつぶやく。
「俺は局長なんて出来る器じゃねえんだよ」
「死んだ方が楽だ……」
　そして泣きながら情婦の体を求め、その最中に近藤により「粛清」されてしまう……。
　一方、後半の中心人物となるのは土方歳三。演じるのは小林桂樹だ。
　小林桂樹といえば、生真面目だったり、どこかコミカルだったりする庶民的な役柄の印象も強いが、一方で自らの美学にこだわる熱意のあまりに周囲が見えなくなってしまう狂信的な役柄も少なくない。代表的なところでは、依頼人の無実を証明するために墓場から遺体を掘り出して首を切断する弁護士を演じた『首』や、日本の沈没を予言する地質学者を演じた『日本沈没』が挙げられる。そして、本作で演じた土方歳三もまた、しかり。
　土方は、隊の規律を守るために掟を守ることを徹底する。そのためには、結成以来の仲

間で他の隊士に慕われている山南や河合でも、法度に違反すれば容赦なく「粛清」していった。そして、死に際の山南に「隊士は局長や副長の人形じゃない」と言われ思い悩む近藤に、言い放つ。
「河合、山南の死に振り回されている時ではない！」
「あなたの情が隊を動揺させるんだ。私は新選組のためにやっているんです！」
「批判、憎しみ、呪い、大いに結構。隊士を引きずっていくためには血と涙はいらん。凍った血で結構！」
　そうヒステリックにまくしたてる小林の表情には、一分の隙もない。己の信念のため、あえて非情に徹しようと覚悟した男の、明らかに一線を超えた姿がそこにはあった。
　人間的でありすぎたために、自らの立場の重みに潰されていった芹沢＝三國。自らの立場を全うするために、人間であることを捨てた土方＝小林。両名優がスクリーンからほとばしらせ続けた狂気により、「組織を率いる」ことの恐ろしさが生々しく伝わってくる。

　時に温かく、時に狂気と共に、新選組は描かれてきた。だがそこには必ず、自らの信じる「義」を貫く男たちの姿が描かれてきた。翻って、現実社会では我々はいつも時代に流され、妥協しながら生きていくしかない。だからこそ、いつの時代も人々は新選組にロマンを感じ、絶えることなくそのドラマが作られ続けるのである。

【DVD 情報】
『新選組血風録』（東映ビデオ）
『沖田総司』（東宝ビデオ）
『壬生義士伝』（松竹ホームビデオ）
『新撰組』（東宝ビデオ）